

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
中間評価結果

プログラム名	学術知共創プログラム
課題	A：将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方
研究テーマ名	コロナ危機から見る政策形成過程における専門家のあり方
研究代表者	大竹 文雄
所属機関・部局・職	大阪大学・感染症総合教育研究拠点・特任教授
総合評価	
A－ 概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である	
評価コメント	
本研究テーマは、新型コロナウイルス対策における経験について、人文社会科学系の研究者だけでなく、医学・医療関係者、行政担当者等も含めて、ワークショップ、対談、鼎談、シンポジウム等を通じて議論を深め、成果を学術論文、著書、Policy Discussion Paper 等により積極的に公表してきている。また、フォローアップでの所見を踏まえて、現場や実務家らとの対話にも努めてきた。これらの活動による研究の進展は評価できる。 しかし、採択時に期待された本研究独自の学術的成果を十分上げるには至っていない。その原因として、他国ではどのような新型コロナウイルス対策がなされて、日本では何が問題であったのかという国際比較や、グローバルな視点からの分析の欠如が挙げられる。また、新型コロナウイルス対策の本質的な問題であるリスクアナリシスの仕組みの運用に踏み込んだ分析も不足している。意思決定過程への専門的見地と、それを採用したときの政策的判断との関係や、それを担う担当者の関係構築等について、日本の新型コロナウイルス対策における問題点を明らかにした上で、改善策を探っていくことが本研究の目的達成には不可欠と考えられる。さらに、現場や実務家らとの対話に加えて、より広く市民社会との協働を模索していくことも求められる。 研究期間の後半では、専門家による科学的助言のあり方に関するガイドラインの作成に加えて、社会状況も技術も大きく変化する中で起きると予想される次のパンデミックにおいて、人文社会科学がどのように貢献できるか、各分野の研究者が具体的にどのように連携して何をするか、異なる専門の境界を超えてどの専門的意見を活用するか、といった点に関する提言が期待される。	